

赤木桁平

リアリズムの時代

第三章

リアリズムの時代

(『彼岸過迄』―『明暗』)

茲ここに更あらためて云うまでもなく、漱石先生の修善寺に於ける大患は、恰ちようど度『門』（明治四十三年発表）と、『門』の次ぎに発表された『彼岸過迄』（明治四十五年発表）との中間時期、即ち、明治四十三年の中頃から明治四十四年の初頭にかけてのことである。先生の全生涯に於ける最も重大な経験として認したたむべきこの大患が、その後に於ける先生の芸術的生活に果してどれだけの影響を持つたか。それは自分の軽々に臆断するを容されないことで

あるが、併し、自分一個の見地からすると、この大患はすくな尠くとも先生の眼を人間の「心靈」若しくは人間の「精神」に向つて放たしめ、そこに見えざるもの、形なきものの本体を掴み、その本体の恐るべき力が如何に人間を動かし、如何に人間を操縦つて行くか、その不可思議なる真相を見究めようとする新しい——否、新しいというよりも寧ろ先生本来の傾向を押し進めて行つたに相違ない。言葉を換えて云うと、これまで事物觀照の態度に於いてのみ確立の域に達していたリアリズムが、その後は対人生の根本的態度に於いて完成の境地まで徹底しよう

とする傾向、即ち、平面的にのみ押広げられていたリアリズムが、さらに立体的に切り下げられようとする点に、自分はこの大患が必ずや何物かを先生に貢献するところがあったに相違ないと信ずるものである。自分はこの明瞭なる証左を求めて、先ず大患後最初の製作たる『彼岸過迄』の裡に発見する。先生が真当の意味で、リアリズムの芸術家として現れたるは恐らく『彼岸過迄』以後のことであろう。

『彼岸過迄』

「個々の短篇を重ねた末に、其の個々の短篇が相合して一長篇を構成するように仕組んだら、新聞小説として存外面白く読まれはしないだろうか」という先生の意見を具象して、この意図の下に初めて生れたのが『彼岸過迄』である。『彼岸過迄』は『風呂の後』以下『結末』に至るまで、長短約七篇の短篇小説を集め、これを一箇の長篇小説として、総合的に統一したものである。形式上、各箇の短篇が有する内容のすべては、皆大学を出たての

一青年田川敬太郎の「人生智」を盛る最初の世間的経験として描かれてはいるが、田川敬太郎は必ずしも本篇の主人公ではない。

最初の短篇『風呂の後』と、第二の短篇『停留所』とには、共に先生の前期に於ける芸術的境地、即ち、所謂低徊趣味なり非人情趣味なりの匂いが出ているところにかなりの興味はあるが、併し、自分をして忌憚なく云わしめると、何れも大した価値あるものではない。殊に、後者に至っては寧ろ一種の遊戯と見るべく、読者の好奇心を挑発する以外に何等の意味もないと思う。これに較

べると、田口という実業家や自ら高等遊民を以て任ずる松本などの出て来る『報告』や、松本の娘宵子の死を描いた『雨の降る日』などという短篇は、皆それぞれの意味に於いて面白い。併し、前者の面白味は主として田口や松本の人生観の上に存しているだけであるが、後者の面白味は単に「美しいものが美しく死んで美しく葬られる」「憐れさの中にあるだけでなく、松本のその愛児の死に対する心持、その心持を通して理解せられる先生自身の心持（宵子の死は、先生の愛児雛子さんの死を描いたものであることは既に云った通りである。森鷗外先生の短篇に

『金比羅』というのがあって、同じく愛児の死が描いてあるが、この二作を比較すると、自ら両先生の特性が窺われて面白い)の上にあるのであって、全く二重な意味で感興を惹くのである。

上述の四篇を除外すると、後に『須永の話』、『松本の話』、『結末』の三篇が残るわけであるが、最後の『結末』は字義通リテラリに結末であって、全篇の結構を整える上に必要こそあれ、それ自身の裡には大した意味を含んだものではないから、茲では態わざと言ひ及ばぬことにする。こう云って終しまうと、『彼岸過迄』の価値的焦点は自然『須

『永の話』と『松本の話』との二篇に落ちて行くわけであるが、事實は實際その通りであつて、この二篇を外にすると、『彼岸過迄』の芸術的価値は、決してしかく重大なものではない。

『須永の話』は、須永市蔵すながという青年が、その従妹に当る千代子という女との關係に就いて、悉くわしい経緯を敬太郎に告白する形式になっているが、この一篇に於いて、先生は初めて深刻なる心理解剖家として現れ、人性の奥深く潜在する人間のエゴイズムに就き、極めて微細な、極めて精緻な洞察を加えていられる。従つて、この作品

が著しく特色を發揮するのは、鎌倉なる田口の別荘に於ける須永と高木との邂逅以後に属しているが、須永が明確に愛を意識してもいず、猶お更ら細君にしようという意思をも持っていないに關らず、千代子と高木との接近を嫉妬せずに行られない気持は、その潜在意識として存する相互の愛と、その愛を反撥して動く主我心エゴイズムとの細緻な心理の解剖に依り、殆んどゴンチャロフを思い出させるような巧みを以て描き出されている。「僕は普通の人間でありたいという希望を有っているから、嫉妬心のないのを自慢にしたくも何ともないけれども、今話した様

な訳で、眼の当りに此高木という男を見る迄は、そういう名の付く感情に強く心を奪われたためし試がなかつたのである。僕は其時高木から受けた名状し難い不快を明かに覚えてゐる。そうして自分の所有でもない、又所有にする気もない千代子が原因で、此嫉妬心が燃え出したのだと思つた時、僕は何うしても僕の嫉妬心を抑え付けなければ自分の人格に対して申訳がないような気がした。僕は存在の権利を失つた嫉妬心を抱いて、誰にも見えない腹の中で苦悶し始めた」——こういう執念深い、盲動的なエゴイズムの複雑な心理は、気分から気分への転移、

意識から意識への変遷を追縦する作者の筆によって、読者の頭にはつきりした理解を与えるのである。殊に、須永は常に人格を口にし、自尊心を楯に取る男であるが、その人格なり自尊心なりが、要するに須永自身の主我心を満足させるための正ジャステイフイケーション当理由たるに過ぎないところ
に、作者たる漱石先生の極めて深鋭なる洞察力を見るのである。

須永の性格は、『松本の話』に至つて、初めて明瞭なる説明をえた。若し、ツルゲーネフがルーティンを創造し、ゴンチャロフがオブロモフを創造したという言葉が

容されるならば、先生は明かに須永を創造した。須永は先生を待って初めて生れ、先生の筆を待って初めて描かれうる性格であって、先生の描いた多くの性格中、彼のごときはその最も眼覚ましい「型」の一つである。

松本は云う。「市蔵という男は世の中と接触する度の内へとぐるを捲き込む性質たちである。だから一つ刺戟を受けると、其刺戟が夫それから夫へと廻転して、段々と深く細かく心の奥に喰い込んで行く。そうして何処まで喰い込んで行っても際限を知らない同じ作用が連続して、彼を苦しめる。仕舞には何どうかして此内面の活動から逃れた

いと祈る位に気を悩ますのだけれども、自分の力では如何ともすべからざる呪いの如くに引張られて行く。そうして何時か此努力の為に斃たおれなければならぬ、たった一人で斃れなければならぬという怖れを抱くようになる。そうして氣狂のように疲れる——こうした内省的な、退嬰的な傾向に虐げられた性格が、その本能的なエゴイズムの地盤に立ちながら、自己を困いによう饒する寰境かんきようの刺戟に反応しつつ苦悶を重ねて行くのは近代人のフェータルな特質の一つであるが、この近代人のフェータルな特質を描くことに於いて、『彼岸過迄』は驚くべき成功

を遂げている。殊に、自分が面白く感ずることは、松本が自ら告白して、「僕はこういう市蔵を仕立上げた責任者だ」と云っていることである。

自分は前に『門』に出て来る坂井を評して、「その傍観者的、高等遊民的態度が、何となく中年期に於ける代助を想像させる」と云ったが、『門』の坂井と『彼岸過迄』の松本とを比較すると、二人の間にはさらに著しい類似がある。その松本の生活態度乃至対人生ないしに就いての解釈が、現代日本の文化に蕩漾しつつある彼自身にとって一種の「廻避」であると同じ意味で、これを直ちに須

永に対する一種の「廻避」として適用した（尤もそれは失敗に終わったとは云うが）ところにて、自分は作者たる漱石先生の暗示的思想を見出すものである。何故なれば、松本は自ら高等遊民を以て任じ、「現代日本の開化の影響を受ける吾等は、上滑りにならなければ必ず神経衰弱に陥る」と云うある学者の説を信じている男であるが、嘗て上述のごとき説をなした学者は先生自身（『社会と自分』中の「現代日本の開化」参照）であり、且つ、「懐手をして世間を狭く暮したい」と云ったのも先生自身だからである。——代助の抱いているような思想が、松本

の抱いているような思想に発展して行く径路に就いての考察、それは極めて興味ある題目には相違ないが、他日先生の『人』を論ずる時に詳説すべきであろう。

『行人』

『彼岸過迄』のごとく、『行人』は『友達』以下四箇の短篇を集めて、一つの長篇小説を構成している。この試みは猶お継続して『心』にまで及んでいるが、『道草』以後は旧きに帰って、先生は再びこうした形式を選ばれ

なかつた。それに就いて、先生自身に果してどんな思惑があつたか、若くは、単なる偶然であつたか、それは今自分の触れて見たいと思うことではない。

その内容に就いて、若くは、その形式に就いて、いろいろの視点なり側面なりから自分は『行人』に対するかなり複雑なる解説や批評やをすることは出来るが、今はその全部を棄てて、単に『行人』の有する一角——併し、その一角は恐らく先生の最もシリアスな努力が織り込まれているであろうと想像せられる一角に就き、極めて大雑把な卑見を開陳して見たい。実際、『彼岸過迄』とか

『行人』とかいう風な作品になって来ると、もう性格描写がどうの、これこれの場合がどうのというような純技巧的方面の批評を繰返している暇は無く、自分等はもつと突込んだ、もつと突き詰めた問題にぶつつかつて、そこに芸術家の眼が如何に働き、芸術家の心が如何に動いているかを見究めねばならない。それが先生のような「心」の芸術家の精神を生かす上に於いて、最も必要な、且つ、最も重大な任務だと思ふ。

『彼岸過迄』に於いて、ある程度まで切り下げられた先生の「心」に対する洞察は、『行人』に至ってますます

鮮かな色を示して来た。そこには一人の哲学者が描かれている。彼は恰も須永のごとく内省的な、事物の本体を睥^しつかりと把捉しなければ承知出来ない男である。こういう態度を以て自己の生命に奉仕するとき、そのすべてが到底闡明^{せんめい}しえられざる現実であり、到底解釈しえられざる人生であると悟ったとき、彼は卒然として懐疑のどん底に堕ちて終う。取りも直さず、彼はすべての「所有感」から見放され、すべての「絶対感」から追い出されて、自己全体を、擅^{ほし}いままに喰い込む孤独の寂しさに委ね、独り救われざるの苦悶に泣くのである。——『彼岸過迄』

の須永は、既にこの苦悶の一面に触れていたが、『行人』の哲学者に至っては、それが痛々しいほどの切実を以て描き出されている。

そこには捕えられざるものを捕えようとする焦慮がある。その焦慮が遂に徒労に終ろうとする悲哀がある。その悲哀が再び救われる時がなかりと予覚する寂寞がある。——『行人』の哲学者は、この焦慮と、この悲哀と、この寂寞との上を輾転てんてんして、永久に如何ともすべからざる運命に司配されている。この意味に於いて、彼と、彼の妻との間に於ける悲劇は、どうかして睨っかかり抱き付

こうとする「魂」と、どうしても睨っかかり抱き付かせることの出来ない「魂」との間にあるのであって、それが遂に一種の宿命として認められるとき、この悲劇はますますデスペレートな色を加えて来るのである。

『行人』の哲学者は、茲に至らずんば止まない自己の性情を解して、「全く多知多解たちたげが煩いをなしたのだ」と云っている。この歎きは嘗て『門』の宗助が鎌倉の禅堂にあって逢着したものと同じであって、「彼は平生自分の分別を便りに生きて来た。其分別が今は彼に祟ったのを口惜しく思った。そうして始めから取捨も商量も容れな

い愚かなものの一徹一凶を羨んだ」という作者自身の彼の悲哀に対する註釈は、その量の大小に於いてこそ相違があれ、その質に於いては全く『行人』の哲学者のそれに等しいものだと思う。——生死の境を超越し、全我を投擲した領域に逸去し尽そうとする思念を以て、その全生涯を思索と瞑想との裡に過して来られた漱石先生にとつて、嘗て『門』の宗助が経験し、今また『行人』の哲学者が経験しつつあるところの苦しみは、果して如何なる心的関係を持っているであろうか。『門』の宗助に対して坂井の生活を思い、『行人』の哲学者に対してその

友人の態度を考へるとき、自分はそこに漠然として未だ形を作すに至らない先生自身の悟道觀を見出すように思う。現に、先生は『彼岸過迄』の須永に対してさえ、その対置者（すこし言い過ぎた言葉ではあるが）としての松本を描いた。松本は須永を評して、「彼の不幸は彼の聡明靈利に基くのだ」と云った人である。『行人』の哲學者の友人は『行人』の哲學者を評して、矢張松本と同じ言葉を遣った。「知識を有するものの悲哀」——ドイツ輓近派ばんきんに属せる一批評家の云った言葉、この言葉を自分しみじみは沁々と想い起さずにはいられない。

『行人』に於いて、疑いもなく先生は「救われざる心」の悲劇を描いた。それは一面に於いて単なる愛の悲劇であるが、それと同時に、他の一面に於いて人生そのものの悲劇を意味するところに、かなり根深い先生のペシミズムが芽ぐんでいる。このペシミズムはさらに発展して『心』に及んだ。『心』は先生のペシミズムを具体化した、最も深刻な、且つ、最も優秀な作品である。

終りに^{のぞ}苳み、『行人』の技巧的方面に就いて一言する。『行人』が有する四個の短篇の中、最も卓^{すぐ}れているのは矢張最後の『塵勞』である。殊に、Hの手紙がいい。煩

瑣な意識の末に至るまで披発し、繊細な心理の微に至るまで追縦して、あくまで哲学者の内的生活を如実に描き出したところは、ひたすら只管敬服の外がない。この哲学者に較べると、哲学者の細君は、まだ何処となく描き足りないところはあるが、併し、ああいう性格を持ち、ああいう運命の下に動いて行く女としては、兎に角生々としたところを持っている。殊に、和歌山の宿屋に於ける彼女は、運命を恐れない、否、運命の司配に自己を委ねて毫も介意しない、最も強く生きうる女として、殆んど何の遺憾もなく描けている。——その他の点に就いての批評は、

すべてこれを省略することにする。

『心』

『心』は人間の「心霊」に対する、若^もしくは、人間の「精神」に対する、もつと分り易く云うと、人間の「心」そのものに対する、最も精到な、最も深刻な洞察を徹底せしめようとする、漱石先生畢生の大努力を象徴するものである。

「心」の本質は如何、「心」の真^{すがた}当の相は何であるか。

この問題は『彼岸過迄』に於いて、また、『行人』に於いて、既に幾度となく先生の脳裏を擦過し、既に幾度となく先生の研究的対象として取扱われたものであるが、それらはすべて「心」の外部に於ける摸索から初まって、漸次内部に立人ろうとする間接的な態度たるを免れない傾向があつた。併し、『心』に於いては、先生の観照的態度が初めて直接的になつた。言葉を換えて云うと、『心』に於ける先生は、真正面に「心」を観、肉迫的に「心」の本質を剥り出そうとする惨酷な心理解剖家となつた。——『心』に表れている先生の態度は、一分の廻

避すら許さない、一髪の隠蔽すら認めない峻厳な裁判官のそれである。

併し、その結果として、先生は「心」の中に果して何を認めたか。先生の答えは単簡である。曰く「エゴイズム」。

人間の本性を司配するエゴイズムの威力と醜悪とに就いて、先生はこれを盲動的な本能として『彼岸過迄』の中に描いた。『心』に至っては、それよりも一步を進めて、さらに意識の上に現前する動かしがたい事実としてこれを描いた。「人間の本性を司配するものには道念も

ある。併し、道念の力は未だエゴイズムには及ばない。最後の一瞬に於いて、人間の意思を駆役し人間の方向を決定するものは常にエゴイズムである。道念ではない。その最後の一瞬は何であるか、常人に在っては金、非常人にあつては恋——先生が『心』に於いて具象しようとした思想は、大抵以上の言葉に尽きている。併し、先生の取扱つた問題は、単にそこまで行つただけで止まなかつた。先生はさらに今一步を進めた。曰く、「エゴイズムを満足しえた後の道念の反噬——ある意味に於いて、それは嘗て『門』の宗助が逢着した問題であり、『心』

にあつては、『心』の主人公が^{でくわ}出会した問題である。和辻哲郎氏は云う、「利己主義と正義との争い」と。

以上の見地に立つと、『心』は尠くとも二つの視点から観察せらるべきである。即ちその一つは、恋愛の試練に依るエゴイズムが、如何にしてその威力を振うたかということ、今一つは、道念の反噬に依る苦悶が如何にして破滅にまで導いたかということ——この複雑なる心理が、先生の筆に依つて果して必然的な解剖を得たかどうか。それに就いて聊^{しやん}か観察して見よう。

第一の題目に於いては、自分は先生の筆に殆んど何等

の不満をも感じない。そこには一人の女に対する競争者として現れた二人の男が描かれている。それらの男の一方は、自己の恋愛感情を満足させようというエゴイスチックな動機から、表面には極めて美しい友情と正義との仮面を被りながら、裏面にあっては性格上に有する相手の男の弱点に乗じて、あくまでこれを蹴落すべく努力しようとする。この複雑なる心理の推移を追跡して、先生の筆は極めて精到に、極めて深刻に動いている。殊に、よく描けていると思うのは、Kの女に対する態度に対して漸々不安を感じて行くようになる径路や、Kに先手を

打たれた後に「万事休す」と思いながら、猶おKの精神的な間隙を覗ねらい、その上に押し蒐かかって相手を圧倒しようとする執念深い気持などである。この意味に於いて、三百六十五頁から三百七十一頁に亘る精緻な描写は、『心』一卷の中に在って最も潑刺たる生氣を持った場面である。——やが臆やがて最後の悲劇が来た。その悲劇とともに、まゝんと自己のエゴイズムに対する完全な満足をえていた一方は、計らずもその満足を裏切つて動く一つの強烈なる反逆者に出会した。彼は云う。「叔父に欺かれた当時の私は、他の頼みにならない事をつくづくと感じたには

相違ありませんが、他を悪く取る丈あって、自分はまだ確な気がしていました。世間は何うあるうとも此己は立派な人間だという信念が何処かにあったのです。それがKのために見事に破壊されてしまって、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです」——云うまでもなく、『心』に取扱われている第二の悲劇は、こうした問題の中に胚胎しているのである。

併し、この後者の問題に至って、先生の筆は稍筋書^{やや}的

(或は観念的と云つていいかも知れない) な色彩を帯びて来た。言葉を換えて云うと、後者にあつては、前者に於けるがごとく、その心理の推移に「必然」の強味が乏しい。従つて、幾度か不安の論理を重ね、幾度か絶望の弁証を積んで、漸次最後のカタストロフィまで主人公を引摺って行こうとする作者の用意は周到を極めていても、その努力の結果が与える効力は到底前者のごとく豊富でない。無遠慮に云うと、第一、信用していた叔父に財産を横奪されただけで、あらゆる人間に対する信用を喪うて終しまうというのも極端であるし、また、自己に対する信

用の喪失が、自己の愛する妻をも見棄てて終わせるほど絶望的だということのも極端である。——思うに、リアリストたる漱石先生も、未だ『心』にあつては、全然観念的な殻を破りえなかつたのであろう。

この意味に於いて、『心』に次いで『道草』が現れ、『道草』に次いで『明暗』が生れたことは、それ自身かなりの興味に値することである。何故なれば、そこに先生最後の使命が残され、そこに先生の芸術に於ける最後の色揚げが委ねられていたからである。

『道草』

あらゆる芸術品は、その作者にとって、皆何等かの意味に於ける自叙伝であると云いうるが、『道草』はもつと実際的な意味に於いて、漱石先生唯一の自叙伝傾向を帯びた作品である。併し、『道草』に表れている自叙伝的傾向は、ストリンドベルヒの諸作に表れているがごときそれとは違い、寧ろ特種の意義から離れた純粹の芸術品として鑑賞せらるべき性質を多量に帯びている。この意味に於いて、漱石先生の『道草』に対する関係は、あたたか恰

もトルストイの『コサツク』に於ける、ドストエフスキ
ーの『虐げられし人々』に於けるがごとき関係に近いも
のであって、その作品の中に描かれている大小幾多の事
実が、すべて皆作者自身の芸術的生涯に於ける實際経験
の告白であると推定することは出来ない。

『道草』には、一篇の主人公たる健三を中心人物とし
て、その周囲に纏繞てんにようする多くの人々、例えば、健三と
細君、健三と島田、健三と比田夫婦などとの人的関係が
描かれている。別に事件の変化もなければ、別に性格の
発展もない。いわば平凡な日常生活の報告である。この

平凡な日常生活の報告に於いて、先生は『心』に於いて取扱った問題に、さらに一般的、普遍的な解釈を与えようとした。それは何であるか。一つは、夫婦間に於ける愛が相互のエゴイズム（自意識の拡張）に依って歪められ、傷われて行きながら、しかも終に相離れることの出来ない一種の運命である。今一つは、ある個人を中心として動く周囲の世間に於けるエゴイズムが、その個人に向って如何に働きかけられ、如何に注ぎかけられるか、また、それに対するある個人のエゴイズムが如何に反応し、如何に反撥して行くかということである。——言葉

を換えて云うと、『道草』一巻の有する意義は、エゴイストを以て出来上った一群の人々（それは臆^{やが}て世間そのものである）が、各自のエゴイズムを遺憾なく露^{あらわ}して行く心理と形式とを、最もリアリスチックな、且つ、最もナチュラリスチックな態度を以て描き出したところにある。しかも、その描写の態度に於いて、作者は常に二重の視点を持っていた。性格の視点と、その性格を誘導する心理の視点とがそれである。

そこには愛に渴した二つの霊がある。その二つの霊は相互に愛を求めて、しかも相互に愛を与えることが出来

ない。愛を享けたいという願望もある。愛したいという意思もある。併し、二人は二人の霊を投げ出して、睨しつかり抱き合うことが出来ない。睨しつかり抱き合おうとすれば、その瞬間に二人は相反撥する。この時愛は變じて憎みとなる。これを以て一方は自己に対する無理解から起ると感じ、一方は自己に対する愛の稀薄から来ると思う。かく愛と憎みとの複雑なる感情が交錯して、日常生活の果しない円輪の上をぐるぐる廻って行くように、二人の運命も、また、二本の並行曲線となって、相寄り、相離れ、永遠に交ることを知らない生命の歩みを続けて

行く。この悲劇を眼前に見ながら、猶お一方は一方の前にひざまず跪いて、自らの愛を捧げることにも出来なければ、況んや、自らの愛を捧げることによって、逆に先方の愛を喚起することも出来ない。——執念深い自己意識の葛藤、宿命的な愛のエゴイズムがそれである。

また、そこには策略と、技巧と、虚偽とで固められた世界がある。それらの世界は常に自己自身のために計つて、動ややもすると他を侵害しようとする。侵害されたるものは、侵害されたる自己の非力と、怯懦きょうだと、責任とを忘れて、直ちに罪の全部を相手の人格に課し、冷笑と、侮

蔑と、憤怒とを交えながら、偏ひとえに自家の立脚地を弁護しようとするが、傷けられたる自我の苦しさと、欺かれたる自我の淋しさとは、すべての弁護を排して、あくまで侵害されたるものを追及しようとする。かくて侵害されたるものは、怯懦と罵り、卑怯と嘲る声を自己の背後に聞きながら、猶お能う限りの逃避を試みようとする。

——そこにエゴイズムの醜悪と悲哀とを発見する。

さらに『道草』の作者は、人間の「心霊」に巢喰うエゴイズムが如何にして孵はぐくまれ、如何にして育つかに就いて、主人公健三の生い立ちを記している。これは『道

草』一卷に於ける最も精彩ある部分の一つであるが、中に就いても、主人公の少年時代の回想を叙述したあたりは、自然及び人事に対する種々雑多な記憶が、淡々しい中に極めて印象的な確實さを以て描かれ、それを讀んでみると、何故とは知らず、読者の胸に夢幻的な哀感がひしひしとこみ上げて来て、坐そぞろに作者の詩人的天分の豊かさを想見させる。——併し、そうしたりりカルな部分を外にして、仔細に主人公の少年時代を攷こう覈かくすると、そこには我儘わがままと、放恣ほうしと、専横とに馴らされ、すべて自己を中心として動く一人の小暴君を見出すことが出来る。

しかもこの小暴君をして茲ここに至らしめた原因を解して、作者はこの小暴君に対する周囲のエゴイスチックな動機から来る過度の撫愛であると見た。撫愛そのものはいいが、その撫愛の不純な動機に根ざしているのが小児の順良な性情を害するといっているのである、この見地に立つと、人間のエゴイズムは終ついに滅びる時はない。人間のエゴイズムが滅びる時は、人間そのものが滅びる時だという一種の絶望感に逢着せざるをえない。併し、作者は『道草』に於いて、もう『行人』や『心』に於ける絶望を繰返しはしなかった。——ただ諦認があつた。ただ現実を現実

として受け納れる人の諦認があつた。

『道草』の技巧に就いて一言する。

健三を中心として発展する二つの関係の内、健三と細君との夫婦関係を描いた作者の筆には、性格と心理との必然がじっくり結び付いて、事実を生かして行く靈活な力が潜んでいる。——古淡な匂いを持ったその文章もいい。何処となく悠揚たる落着きが出ている。老練というのであろう。

『明 暗』

漱石先生の全製作中に於ける最大の述作であつて、且つ、先生の芸術的生涯に於ける最後を飾るべき長篇小説『明暗』は、回を累ぬかさること百八十八の多きに及びながら、その最も興味ある場面に於いて筆を断ち、不幸にして未完のままわれわれの手に残された。

先生の生前、『明暗』が未だ新聞紙上に連載されつつあつた頃、何人があつて、先生に向いかれこれ批評的な言葉を吐くと、先生は直ちにこれに答え、全部完結の

後、今一回通読を煩わした上での批評が聞きたいと云われた。蓋し、^{けだ}先生の意図は、個々の部面に於ける鑑賞的な効果を収めて、いわゆる小巧小緻の技巧に読者を魅了するよりもむしろ価値の焦点をその全体的な構成の上に置き、最も総合的な、且つ、最も統一的な意味に於いての効果をえようというところにあつた。然るに先生の意図は遂げられなかつた。勿論先生は残念であつたに相違ない。

併し、自分から云うと、未完稿として残された『明暗』一篇は、それ自身既に一種の驚異である。言葉を換えて

云うと、全篇七百四十四頁を通じて動く作者の技巧と精神との力は、それが仮令たとい完結されない技巧であり、仮令充実されない精神であるにしても、猶お読者たる自分にとって、かなりの讚美と敬仰とに値するものであつて、そこに芸術的威力の偉大を見出しうるのである。

『明暗』に於いて、漱石先生は果して何を描こうとしたか。疑いもなく、そこには多くの性格がある。多くの事件がある。多くの心理がある。併し、その多くの性格を貫き、その多くの事件を通じ、その多くの心理を穿つて、漱石先生は果して何を描こうとしたか。——さらに直截

に云うと、『明暗』一篇の基調を形作っているところの根本思想は果して何であるか。

この質問に対し、自分はまたもエゴイズムという言葉
を挙げなければならぬ。そして『明暗』一篇の有する
芸術的興味の中心が、主として人間各自のエゴイズムに
基く日常生活の「明暗」を描出するところにあると云わ
なければならぬ。——『彼岸過迄』から『行人』、『心』
を経て『道草』に至るまで、断えず先生の頭脳を司配し
た^{しやはん}這般の問題はその最後の製作に於いても、また、執拗
に先生の頭脳を司配する問題に^{ほか}外ならなかつた。「利己

心理の解剖家」——これは先生の芸術的生涯に於ける後期の特質を説明する最も恰当こうとうなる言葉であるかも知れない。

『明暗』に於ける先生は、明かにエゴイズムとしての人生を見ている。尤も、あるものは意識したるエゴイズムであり、あるものは意識せざるエゴイズムであり、あるものは情愛のエゴイズムであり、あるものは功利のエゴイズムであるが、何れいずにしても皆エゴイズムであるには相違ない。それらのエゴイズムが、何等かの関係の下にあって、相互に相触れ、相剋し、相争いながら、転瞬の

間も熄やまない戦鬪の活画図を描き出すところは、恐らく『明暗』一篇の眼目でもあろうし、また、作者たる先生自身の見た実人生の偽りなき相でもあろう。先生は嘗かつてかくのごとき人生を悪んだ。そしてそれが実人生の偽りなき相であると知った時、その如何ともすることの出来ない事実に対して絶望した。絶望は臆やがて諦認れんびんになった。諦認は——この作『明暗』に至って、初めて一般的な憐愍れんびんになった。先生は云う。「天に則って私を去れ！」と。天に則って私を去るところにのみ、真当の意味に於ける博大の心が湧く。この博大な心を以て自然人生を観る

とき、先生の眼には最早その醜悪を悪む光よりも、寧ろその事実を愍れむ涙がある。この涙を以て津田が描かれている。お延が描かれている。秀子が描かれている。小林が描かれている。乃至何々何々が描かれている。従つて、作者たる先生の態度には、聊かの偏頗もなければ、聊かの好悪もない。すべてを一樣に、すべてを公平に、すべてを同仁に視て、そこにありのままなる人間を再現しようとする。すくなくとも十余年の芸術的生涯と、五十年の体験的背景とを経て、徹底したりアリストの心が、初めて先生の芸術的靈感を司配したのである。この意味

に於いて、『明暗』一篇は、先生の「心霊」と「精神」
とに於ける最も至重なる人生証券である。

果して然らば、その技巧の方面に於いてはどうである
う。自分は聊かその点に就いての考察を加えて見たい。

一口に云うと、『明暗』は素張らしくアンビシヤスな
作品である。ある事件と事件との縫合、ある性格と性格
との配置、ある心理と心理との交渉、——それらの複雑
多端なる資料は、殆んどドストエフスキの諸作を思わ
すような構造を以て、一寸一分の隙間もなく組立てられ
ている。殊に、事件の戯曲的な発展が、それからそれへ

と新生面を開き来って、絶えず読者の注意を喚起してゆく点は、その秀抜なる対話の技倆と相待つて、慥たしかに『明暗』一篇の著しい特色を形作っている。座そぞろに大手腕だと思わざるをえない。

さらにその性格描写や心理描写に於いても、自分は未だわが文壇この作に比敵しうるものあるを知らない。殊に、津田やお延の性格や心理を剔抉てつけつ爬は羅らしてゆく作者の筆は、その精到細緻なる点に於いて、また、その明快澆刺たる点に於いて、殆んど印象描写の極致に達している。例えば、病院生活中に於ける津田を描いた一節を見ても

いい。津田を中心として動いて行く周囲の人々、殊にお延と津田との交渉が、その性格に根差し、その心理に突込んで、如何にも鮮明なる描写を見せている。——思うに『明暗』は漱石先生の芸術的精神と天分との、最も総合的な、且つ、最も鍊熟的な具体的表現であろう。既に森田草平氏も云う。「今更ながら『明暗』は先生の傑作である。先生の思想と技巧とが円熟の頂点に達した作である。同時に又先生が従来のは此一作を完成するため準備に外ならぬと云っても敢て過言ではない」と。

漱石先生の業績に就いての研究は、不満足ながら以上を以て尽きたのであるが、厳密に云うと、先生の業績には、以上の外に猶お少くとも三個の注目すべき述作がある。云うまでもなく、それは『文学論』、『文学評論』及び『社会と自分』との評論的方面に於ける述作であつて、その内実ともに至大な注意に値するものであるが、それに就いては今後「評論家としての漱石先生」を論ずる場合に譲り、今はすべての批評的言辞を差控えることにする。併し、ただ一言自分の憚りなき衷情を表白することが許されるならば、自分は評論家としての漱石先生

の卓越が兎角作家としての漱石先生の光彩に蔽われがちであつて、その評論的方面に於ける秀抜なる天分と業績とが、殆んど一般文壇から閑却され易いことをこの上なく遺憾に思うものだと云いたい。この点に於いて、聊か先生と相似た関係の下にあるものはアナトール・フランスである。この深達なる古典文学の研究家は、嘗て自分自身の閱歴に就いて述べた言葉の中で、「人は自分を評して直ちに小説家だと云う。併し、自分はこの人達に答えて批評家だと云いたい」と云つた。——その風格に於いて先生と一味相通ずると云われる「シルヴェストル

・ボナアルの罪」の作者は、彼自身を説明する言葉に依つて、計らずも先生自身の云いたい心持をも代弁したのではないだろうか。

嘗て『文学論』（文学の発生を心理学的に研究し、文学の消長を社会学的に考覈したもの）を読んで、その警拔なる独創と、その該博なる知識とに驚き、また、嘗て『文学評論』（十八世紀の英文学、特にアヂソン、スチール、スウィフト、ポープ、デフォーなどの作品に就いての批評）を読んで、その特異なる見識と、その明快なる論断とに敬服した自分は、敢てわが国に於ける文芸史家に問いた

い。「抑々わが文壇嘗てかくのごとき優秀なる評論的述作を持ったことがあるか」と。

併し、その精細に亘って評隲ひょうしつすることは、今自分の意図するところでない。今自分の意図するところは、云うまでもなく作家としての先生を研究するところにあるから、この興味ある、且つ、この愉快なる題目は、近き将来に於ける機会に譲って、さらに精到なる批判を加えて見たいと思う。

日本文学電子図書館

リアリズムの時代

著 者：赤木桁平

制作者：宮澤一郎

底 本：「夏目漱石」

講談社学術文庫、講談社

2015年12月10日 第1刷発行

日本文学電子図書館